衣布頼襄謹みて再拝して少将樂翁公閣下に白す。襄、嘗て宋の蘇轍の韓魏公に上るの書を讀みて、之を愛す、以爲へらく、古より言を當世の王侯に進むる者は、大抵求むる有りて自ら售る。譬り轍は魏公の人物を偉なりとし、之を名山大川に比し、其言貌に接して己の作文の氣を養はんと欲す。言、狂に近しと雖、其濶泊にして求むる無きこと知る可きなり。然りと雖、魏公は、是の時猶路に當り轍を秉れり。人將に轍の求むる有るを疑はんとす。閣下は、今代の魏公なり。而して襄の閑地に處る、襄をして轍の所爲を學ばしむるも、以て嫌無かる可し。卽ち徒に仰ぎて心之に嚮ふのみならず。特に貴賤懸絶、宵に轍の魏公に於けるが如きのみならず。今茲尊嫡君俊、幕命を膺け、入朝して大拜の恩を謝す。襄、草莽に伏在し、側に盛事を聞く。而して圖らずも邸吏、閣下の命を帶び、來りて襄の家に就きて、著す所の私史を取り、覽觀を賜はんと欲す。禮意懇懇、愧悚交至る。夫れ襄、敢て閣下に求めず。而して閣下、襄に求む。襄の榮、大なり。復何の嫌ふ所ありて辭避せんや。未だ嘗て款に接せずと雖、其詞命を聞く。亦以て自ら壯とす可し。是に於て、其蒙穢を忘れて、出して下執事に納れ、又敢て瀆告する所有り。

土白河侯書

上白河候書

轍の書に稱す、史遷の文は奇氣有りと。他日自ら古史を作る。則ち遷の疎略輕信、淺陋無識を論ず。夫れ遷は太史に官して、天下の文籍を總領す。猶疎略の一書生を以て、獨力古今を罔羅す。其自ら揣らずして大方の嗤笑を招かんこと、必せり。然れども少小より國乘を嗜讀し、毎に常藩史の浩穰を病へ、又其闕有るを恨む。近代の事と、夫の隆治の由る所とに至りては、先輩の撰著無きに非ざるも、源平氏より斷ちて、今代に至る。間、中興の諸將、及び割據の群雄の治亂に關係する者を以て、家別に之を紀し、或は錯へて之を合す。要するに、其成敗盛衰の狀と、臣屬の謀戰忠邪の跡とを覽て、其大體最も明確なる者を取る。夫の博引傍捜、錙銖を辨拆するが若きは、世に自ら其人有り。以爲へらく、襄翼の及ぶ所に非ざるなりと。

其義例に至りては、蓋し亦淺陋の嘲を貽す者有り。事、一姓の下に繫れるに、統紀して之を總ぶる有り、夫れ右族迭に興り、甲起り乙仆れて、海宇の沿革を成す。而して必ずしも王室に關せざるは、我が中世以還の國勢なり。故に實に據りて體を創め、以て世變を形す。而して其中に貫くに帝系年號を以てして、條理を表す、大義の繫る所に至りては、必ず特書を用ゐる。櫛豪を元帥に厠ふと雖、成敗に隨ひて次第して、署題に因りて統屬を見す。而して之が事實を載せて、名分截然たること、讀者自ら能く之

を見ん。今代の稱謂の若きに至りては、則ち謹みて奕葉名爵天下公行の稱に據る。名實輕重、跡を按じて知る可し。敢て私に名號を撰びて、今代を蹟して後世の耳目を瞞さず。首を閧し尾に至り、其得失の相形を睹、其分裂統合の漸する所を明にすれば、則ち今日無前の功德は、言を待たざる者有り。又敢て喋喋頌贊して人をして其諛と溢とを疑はしめず。自ら謂へらく、敬の至れるなりと。凡そ是れ襄が區區撰述の本意、閣下の爲に之を一言せざるべからず。野人朴直、所謂求むる無きの心を以て書を著し、其簡約を取りて、自ら省覽に便にす。始より之を世に公にせんと謀るに非ず。引據剪裁、皆一家私乘の體を成す所以なり。篤錄體貌に至りては、又一に古史に倣ふ。肯て輓近の文縛を學ばず。是を以て拮据二十餘年、之を篋笥に藏して、未だ嘗て人に示さず。今乃ち閣下の寓目を得て、信を天下後世に取る。眞に意外の幸なり。襄、今日に求むる無しと雖も、千百載に求むる無からず。

大賢の鑒識を經るに非ずば、其傳らんことを保するに足らざるなり。然れども苟も流傳を得ば、今と後とを別たず、其れ世道人心に損益せん。尤も謹を加へざる可からず。襄や病羸、力を父母の邦に效す能はず。況や敢て世に益する有るを望まんや。然れども生れて此極盛の運に遭ひ、其庸陋の筆墨を以て萬一を裨補すれば、則ち太平の民たるに負かざるなり。蘇轍、魏公に謂へらく、苟も以て教ふれを教ふれば則ち幸なりと。閣下、其れ亦襄に教ふる有れ。尊嚴を冒瀆す。惶懼已む無し。

文政十年丁亥五月二十一日、布衣頓襄謹みて再拜して白す。

上白河侯書